教科会を生かした授業改善の取組

倉敷市立琴浦中学校

1 はじめに

本校は倉敷市南部の瀬戸内海沿岸に位置し、全校生徒は425名（令和5年度）です。明るく人懐こい生徒が多く、学校行事や部活動に熱心に取り組み、授業でも活発な発言場面がよく見られます。しかし、授業内容の定着度合いはあまり芳しくなく、学習習慣が十分には身についていない生徒が多く見受けられます。

従前より、琴浦中学校版「家庭学習の手引き」を作成し、家庭学習の充実を促してはきましたが、思うような効果は上がりません。学力向上の取組には、キャリア教育の充実と併せて、授業改善の取組が必要であると再認識しました。

2 取組の概要

そこで令和2年度から、時間割の中に週1回の教科会を設定し、担当学年の枠を越えた、情報交換・共有の機会を増やしました。

この校内環境をさらに発展させたいと考え、岡山県教科指導支援事業を活用し、令和3年度には数学科で、翌年度には国語科を加えた2教科で、「タテ持ち」を実施しました。

(1)「タテ持ち」の実践

県内外の先行取組を参考にしながら、数学科の「タテ持ち」を始めましたが、他県のような「教科担当のだれもが、どの学年の、どの授業に行っても、同じ授業ができる」ようにしようとすると、指導法についての合意形成ができず、1学期途中で早くも暗礁に乗り上げました。その時、次の2点を共通理解することで、ようやく本校の状況に見合った「タテ持ち」の実践が進みはじめました。

○教科全体でそろえること・そろえないことを明確にする。

《そろえること》

・目指す生徒像（生徒に身につけさせたい力は何か）
・評価の材料と評価規準
・章末問題

《共有するが、そろえないこと》

・ワークシート
・指導方法（アプローチの仕方）

○3年間を見通した単元計画・指導計画を立てる。

特に「目指す生徒像」を教科担当全員で議論し共有することは、共通の方針のもとに、各教師の個性を生かしながら教科指導の充実を図ることができました。

令和3年度岡山県学力調査では、数学活用の正答率が国・県に比べ3ポイントほど下回っていましたが、令和4年度全国調査では数学の記述式問題の正答率は、国・県と差がなくなりました。「家庭学習が増えなくても授業で勝負しよう」という教師陣の意気込みが生徒に伝わったように思います。

教科会の様子

(2) 教科会の活性化

ベテラン・若手の垣根を越えて、活発に意見交換する数学教科会の雰囲気は、他教科にもよい影響を与えました。ちょうど観点別評価の移行期でもあり、各教科会で評価の具体化が図られました。2教科目の「タテ持ち」に取り組んだ国語科では、単元ごとに身につけさせたい力を明確化し、その力をどのような言語活動で見取るか、3年間の指導内容とどのように関連・発展させるかという視点から議論を重ね、成果を上げました。

グループワークを仕掛けた授業の風景

3 おわりに

「教科会が助けになる」「教科会で話題にしてみたい」と話す教師は多いです。今後「授業の専門家集団としての教科会」に練り上げられるようにと考えています。